

平成29年度/30年度修士論文・卒業論文概要

王, 若曦
九州大学大学院人間環境学府

小杉, 進二
九州大学大学院人間環境学府

柴田, 里彩
九州大学大学院人間環境学府

<https://hdl.handle.net/2324/2230994>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 21, pp.77-96, 2019-03-29. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

教職生活の全体を通じた教師の成長プロセスに関する考察

—複線径路等至性モデリング(TEM)による分析を通して—

小杉 進二

(平成 30 年 3 月修了)

【章構成】

序章

第 1 節 研究の背景・意義

第 2 節 本論の構成と研究方法

第 1 章 教師の成長プロセスに関する研究の展開とその課題

第 1 節 わが国における教師研究の展開

第 2 節 教師の成長プロセスに関する研究の概要と課題

第 3 節 教師の成長プロセスに関する研究と質的研究

第 2 章 教師の成長プロセスと複線径路等至性モデリング(TEM)

第 1 節 複線径路等至性モデリング(TEM)の基礎概念と TEM 図の作成の実際

第 2 節 複線径路等至性モデリング(TEM)の特質とその実際

第 3 節 教師のライフサイクル研究と TEM による分析の視座

第 3 章 教師のライフヒストリーとその事例研究

第 1 節 データ収集方法と分析対象者

第 2 節 管理職のライフヒストリーと各事例分析

第 3 節 教諭のライフヒストリーと各事例分析

第 4 章 複線径路等至性モデリング(TEM)を用いた教師の成長プロセスの分析

第 1 節 初任期から中堅期までの成長プロセス

第 2 章 中年期からベテラン期における成長プロセス

第 3 節 教職生活の全体を通じた教師の成長プロセス

終章

第 1 節 本研究の成果と今後の課題

第 2 節 本研究における展望

【概要】

序章

平成 24 年 8 月に中央教育審議会答申『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』では「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で知識・技能が陳腐化

しないよう絶えざる刷新が必要」として、「学び続ける教員像」の確立を強調している。筆者の研究の関心は「教職生活の全体を通じた」教師の学びとは、どのようなものかということである。学びのプロセスやベクトルは、各個人の立場や時期によって多様に展開されるはずだが、それはどれほどに多様なものであろうか。本研究はこのような動機に基づき、複線径路等至性モデリング(以下:TEM)を用いて教師の成長プロセスについて考察を行ったものである。

第 1 章 教師の成長プロセスに関する研究の展開とその課題

第 1 節では、わが国における教師研究の歴史的な展開と先行研究の類型を整理し、本研究と先行研究の位置づけを明らかにした。

教育学事典(日本教育工学会 2000)、姫野(2013)、脇本・町支(2015)の三者による教師に関する研究の分類を比較し、まとめたのが図 1-1 である。三者を比較すると、分類の規準や目的の定義の違いにより差異や重なりもあるが、ある程度の傾向性や共通性を持って先行研究が分類できることがわかる。本研究の位置づけは図中に示した通り「教師の成長プロセス」にある。

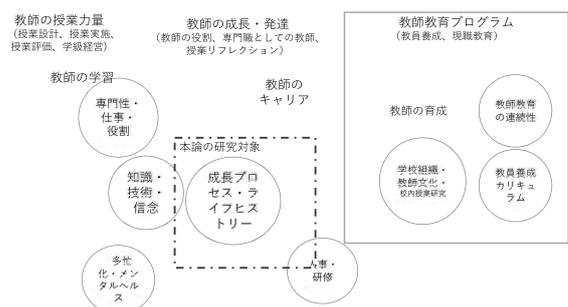


図1-1 教育学事典(2000)、姫野(2013)、脇本・町支(2015)による教師研究分類と本研究の位置づけ

第 2 節では、「教師の成長」に関する先行研究の整理と課題を試みた。ここでは、姫野(2013)の分類にならない「教師の職業的社会的な研究」、「教師の職能成長・発達研究」、「教師の成長を長期的に捉える研究」の 3 つの視点から考察した。教師の職業的社会的な研究には、①教職への進路選択の動機や、学校教師に求められる知識・技能、価値規範の獲得過程を探索したりする予期的

社会化研究と、②教職に就いた後の再社会化の過程を扱った職業的社会化（再社会化）研究があったが、いずれも「教師を目指す、教師という職業に適應する」若年世代の傾向性の分析に限られていた。

この反省に立ち、教師の職能成長・発達研究では「教師になっていく（安藤 2000）」プロセスに関心が向けられた。これらの研究は、教師の学びや育ちが大学での養成教育や初任者研修において完了するものでなく、その後も連続的に進んでいくべきとする成長観を支持するものであり、行政研修の整備と充実を促す理論的基盤となることが期待された。その結果「力量が不足する若手教師」が「研修や経験を積むことで成長していく」というより理想的で標準化された教師の成長モデル（単線・右肩上がりなど）が生み出された。安藤（2000）が指摘する通り「行政研修の体系化」に貢献しつつも、その「過剰な一般化」により固有性・多様性を考慮できない平均的なモデルで教師の成長プロセスを説明してしまったことが大きな課題であった。

このような問題に対し教師個人の成長を質的に深く長くとらえていこうとするニーズが高まり、他の人文科学や社会学分野で既に汎用されていたライフヒストリー、ライフストーリー、ライフサイクル、ライフコース研究といった質的研究法と合流し、「教師の成長を長期的に捉える研究」という新たな研究領域が形成され発展していくことになる。しかし、多様な成長プロセスの実態を描こうとしたライフヒストリー研究や、ライフストーリー研究は、「個別性」に過度に傾斜するもの（安藤 2000）が多く、そこから何らかの一般性や理論を導くことの困難さに直面した。山崎（2012）のライフコース研究では、大規模な質問紙調査による量的分析と各事例分析を組み合わせ、コーホート（同年齢集団）ごとの傾向性を析出して科学的実証に成功したが、同時に語りの持つ質的な厚みの意味が損なわれる難しさを抱えることになった。

第3節ではこれらの先行研究の方法論についての課題を鑑み、本研究でTEMを採択した経緯を明らかにした。TEMには他のアプローチと比較して、以下のような優位性が見られた。1つに「非可逆的時間」というシンプルかつ明瞭な時間概念でプロセスを分析することである。教師の成長プロセスに関する先行研究の多くはプロセスの解明を目指しながら、時間経過を捉えていないものが多く、またライフコース研究のように断続的時間に言及しても、連続的時間変化を取り扱っていない。2つに、先行研究が課題としてきた「単線・右肩上がり」の成長モデルではなく、「複線径路」を想定した多様な成長モデルの析出を可能とすることである。3つに時間の制約の

中では分岐点の数が限られるため、ライフストーリーやナラティブが描く無限の多様性とは異なり、多様性の中にも一般化・パターン化された概念を析出できることである。4つにTEM図の作成は個人のライフストーリーに立脚しているため、語りのオリジナリティを尊重できることにある。

第2章 教師の成長プロセスと複線径路等至性モデリング (TEM)

第2章ではTEMの概要と基礎概念、方法論、他の研究方法との接点について整理と考察を行った。

サトウら（2017）は、研究の対象者に協力を依頼し、その経験を聞くことを「歴史的構造化ご招待」（Historically Structured Inviting：以下HIS）と呼んでいるが、これはサンプリングの分類上は理論的サンプリングの一種となる。TEMでは研究の関心、解明したい事象そのものが等至点（Equifinality Point：以下EFP）となることが多い。この場合、EFPに至った人が研究の対象としてHISを受けることになる。このため、これからある経験をしようとする個人の径路とTEMが示した径路を重ね合わせることで、個人の今後の選択の一助となる。この意味でTEMは「実践に相性が高い方法論」（サトウ 2009）とされ、看護学、保育学、経営学、スポーツ科学と既に多くの学問領域での援用されている。しかしながら、教育学研究におけるTEMの利用例はまだ少ない。この理由を考察すると、1つには幅広い分野を扱う教育学の中でも、TEMの特性から考えると教育経営学や教育方法学分野など実践的領域での運用に限定されることである。2つに、教育学は長い時間軸に生じる人間の変容を対象とした学問領域であり、連続的時間概念である「非可逆的時間」で変容を捉えることは、研究工程上の困難を伴う。3つに、TEMでは「ある経験に至るまで」という時間設定を重んじ、年・月といった時計による時間（クロックタイム）には大きな意味を持たせないが、教育、とりわけ学校教育では「学年」や「年度」のように考慮に入れざるを得ない大切な意味を持つことである。

本研究でTEMを用いるには、上述したような教育学研究におけるTEM運用上の課題を乗り越えるために何らかの手続きが必要である。そこで、明確な年齢を示した時期区分は行わないTEMの立場を尊重しつつ、教師の持つ特性を鑑み、新任期・中堅期・中年期・ベテラン期の4つの時期区分を設け、各時期固有の様相を析出し、それらのつながりの分析に重きを置いて考察を行うこととした。なお、このような教師のキャリア・ステージによる時期区分ごとの特徴を析出したものとしては、サイクス

(1985)らによるライフサイクル研究や、中年期の教師のライフストーリーを分析した高井良 (2015) がある。これらの先行研究では「中年期に見られる危機」(高井良 2015)のように時期区分ごとの考察に主眼が置かれたが、本研究では教職生活の全体の文脈に着目し、それぞれの時期区分固有の様相を生み出す要因や時期区分同士の因果関係、時期区分の境界付近に起きる葛藤、区分内のプロセスなど連続的変容についての考察に力点を置くものとした。

第3章 教師のライフストーリーとその事例研究

本研究では6人の教師たちとのインタビューデータをもとに考察を進めている。ライフストーリーとライフストーリー研究方法の解釈については高井良 (2015) にならうこととし、この章では、インフォーマントである6人の教師と筆者との対話の中で語られたライフストーリーをもとに、そこで語られた内容が時系列に並ぶように配慮したり、解釈を加えたりして再構築しながらライフストーリーとして叙述した。さらにライフストーリーの叙述をもとに各個人のTEM図を作り、歩んできた人生径路を可視化すると共に、その他の径路の想定を通して実際に歩んだ道の意味づけを探った。

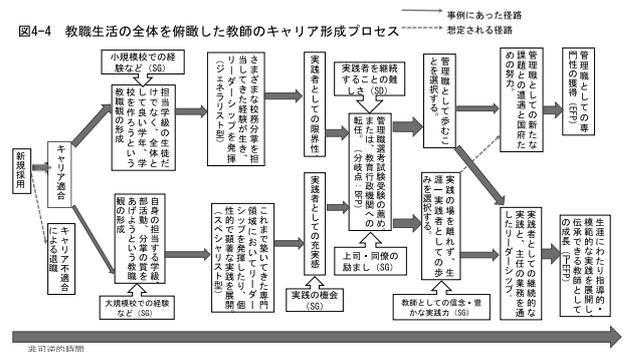
今回、研究協力を依頼したのは、共通して30年以上の教職経験を持ち、60歳の定年退職を迎えた、6人の教師である。これは、「教職生活の全体を通じた」成長のプロセスを解明するにあたり、研究対象者の新任期・中堅期・中年期・ベテラン期を経て定年退職に至る長い時間軸の中での変容を捉えることに研究の主眼を置いたためである。また、いずれの教師も筆者(現職の中学校教諭)との間に、同僚または上司として教職現役時代に勤務を共にした経験を持ち、その後現在に至るまで深いラポールが継続している。これは、西平 (1993) が研究者の「主観的=主体的関与をもってはじめて立ち現れてくる領域」の重要性を論じているように、対象者と筆者の間に深い語りが生じる関係性・信頼性を重視したためである。

この研究では、等至点(EFP)として「管理職として教職生活を終える」ことを、その両極化した等至点(P-EFP)として「教諭として教職生活を終える」こととした。EFPに至る事例として3名、P-EFPに至る事例として3名の計6名をHISした。安田・サトウ (2012) の膨大な研究例から、1事例では個人の径路の深みが、4(±1)事例では多様性が、9(±2)事例では径路の類型の把握ができるとされる。これを本研究に当てはめ、EFP, P-EFPに至るそれぞれ3事例から多様性を描き、全体としての6事例から多様な径路とその類型を読み取るものとする。

また、安田・サトウ (2012) はそれぞれのインフォーマントと研究期間内で3回会うことができることを前提として事例数を設定すべきとし、事例の量より質的な理解の深みを重視している。このことをふまえ、①協力依頼及び研究の主旨・方法論の説明、②ライフストーリーの聴き取り、③筆者が再構築したライフストーリーとTEM図の真正性を共に確認・更新する作業といった研究行程をクリアできる事例数としても、6(3+3)人を設定した。ライフストーリーとTEM図の分析を通して、教師の成長に影響を与える要因を時間軸との対応を意識しながら検討できた。主な要因としては①人事異動を中心とする職場の人的・物理的環境要因、②社会背景、世代的条件、③教育課程の改訂に伴う対応、④教科、学級、部活動などある分野に特化した志向性、⑤生来の特技や専門的資質、⑥教職生活を通底する教師観・信念、⑦教職員組合・民間サークルとの関わり、⑧性差、⑨本人及びその家族の心身の状況などが析出された。

第4章 複線径路等至性モデリング(TEM)を用いた教師の成長プロセスの分析

第4章では6人の各事例を統合し、「校長」として退職することと「教諭」として退職することをそれぞれEFP、P-EFPに設定し、新任期から退職までの教師の成長プロセスを図4-4のように描いた。以下、TEM図をもとに各時期における教師の成長プロセスの課題を考察する。



新任期には教師という職業、学校という職場への適合という普遍的な課題が訪れる。このような入職期の課題を乗り越え中堅期に差し掛かる頃には、自身の専門性や信念・あるいはその時点での関心にに基づき、多様な教育活動が展開される。この時期には、校務におけるあらゆる分野に精通し実践力及びリーダーシップを発揮できる力量を有するジェネラリスト型と、各種分野に特化した専門性を発揮するスペシャリスト型の2つの成長パターンが見れる。中堅期の課題は、ジェネラリスト型とスペシャリスト型の2つの専門性を軸とした教師としての立ち位置を確立することにある。そこには、環境的要因や

個人の潜在的な志向性、信念などが多様に作用する様相が明らかになった。特に中堅期までに小規模校での勤務を経験すると、広範囲の校務処理能力や協働的な学校観を獲得したり、若くから各種分掌主任を経験することとなり、それがジェネラリスト型の成長を促進する。一方、大規模校の勤務では教科指導や学級経営、部活動指導など特定の分野や領域の実践が充実し、それがスペシャリスト型の成長を促進する様相が析出された。

中年期では、ジェネラリスト型のキャリアを積んできた教師たちが管理職という次のステージへスムーズに移行していくのに対し、スペシャリスト型のキャリアを積んできた教師たちは実践の場を喪失することとステップアップとの間に深い葛藤を抱える。新任期から現在において築き上げた教師としての専門性や信念との対話を通して、自らの教職人生をいかにデザインしていくかという最大の難題に向き合う教師たちの様相が明らかになる。

そして中年期の後半からベテラン期に入ると、自分が選んだ生き方の質をいかに高め、それをどのように全うするかという課題に直面する。管理職を選択した者たちは管理者・経営者としての専門性や力量を獲得する新たな学びが要求される。一方、教諭としての実践を定年まで続けることはさらなるリスクが生じる。児童・生徒、保護者との代々のギャップや、若手職員との価値観の相違などに対応しうる柔軟な対応力と、気力・体力の衰えや逆境に負けない強い信念、そして何より児童・生徒、若手教師を惹きつける高い指導力を維持・発展させる学びが求められる。管理職と実践者という両極化した生き方であっても、教職人生の終末期をいかに充実した形で迎えるかという難題の解決に向けて、そして次世代の教師を育てるという世代継承性という使命に対して、教師としての学びが絶え間なく継続する様相が見えてくる。

以上、「教職生活の全体を通じた」教師の学びは、各時期区分で異なる様相を持ちつつも、それらは互いに繋がりを持って展開していくことが TEM 図の分析を通して明らかとなった。析出された課題や要因は、教師の成長プロセスを支える行政施策や学校経営のあり方を検討するために有益な示唆を与えるものと期待できる。

終章

本研究の成果は、1 つにヒューバーマンやサイクスらが示した教師のライフサイクルモデルや、高井良に見られる時期区分ごとのパターン性の析出を拡大し、各時期固有の特徴相互の関係性を考察できたことにより、教職生活の全体という大きな流れの中で教師の成長プロセスを可視化できたことである。

2 つには、教師の成長プロセスにおける多様性について、一般性や共通性を析出できたことである。このことで教職生活上の複線径路の想定範囲も限定され、いくつかのプロセスパターンを検討するだけでも、教師の支援にかなりの意義が見出せるものと期待できる。

3 つには、本研究からジョブ・ローテーションによる広範囲にわたる職能成長の促進と、個人の専門分野を開花できる適材適所の人事異動をバランス良く取り入れる必要性や、管理職を選ばなかったベテラン教師たちを対象にした研修の再検討、メンターや主幹教諭・指導教諭としての人材活用など様々な展望が見えてくることである。このように、TEM が仮説生成ツールとしても有用な研究ツールであることが確認できる。

「学び続ける教員像」が求められる今、本研究が教師研究における TEM の可能性と、教師の成長プロセスについてのより臨床的な知見を提示できれば幸いである。

【主要参考文献】

- ・ 安藤知子(2000)「教師の成長」概念の再検討『学校経営研究』第25巻、pp.99-121。
- ・ サトウタツヤ編(2009)『TEMではじめる質的研究-時間とプロセスを扱う研究をめざして-』誠信書房。
- ・ サトウタツヤ・安田裕子編(2017)『TEMでひろがる社会実装』pp.1-10。
- ・ 高井良健一(2015)『教師のライフストーリー 高校教師の中年期の危機と再生』勁草書房。
- ・ 日本教育工学会(2000)『教育工学事典』実教出版。
- ・ 西平直(1993)『エリクソンの人間学』東京大学出版会。
- ・ 姫野完治(2013)『学び続ける教師の養成 成長観の変容とライフヒストリー』大阪大学出版会。
- ・ 安田裕子・サトウタツヤ(2012)『TEMでわかる人生の径路質的研究の新展開』誠信書房。
- ・ 山崎準二(2012)『教師の発達と力量形成-続・教師のライフコース研究-』創風社。
- ・ 脇本健弘・町支大祐(2015)『教師の学びを科学するデータから見える若手の育成と熟達のモデル』、北大路書房。
- ・ Sikes, P., 1985, "The Life of Cycle of Teacher," S.J. Ball & I. F. Goodson(eds). *Teacher's Lives and Careers*, Falmaer Press, pp.27-60.